

「隠居は御承知頂くとして、改修とは？」
里見義豊は涼しい表情で

「湾からの水利を稲村城まで引つ張る。その運河を掘ることに同意願おうか」と呟いた。

「城から湾までは、およそ一里足らず。それほど運河を里見家単独で掘削することなど…」

「平久里川を用いる」

「やう」

「支流の滝川は城下まで至るゆえ、これを開削することで水利を保つこととしたい」

正木通綱は言葉を失った。

このことは、理に適う施工である。ただ、用いる意図だけが諮りかねた。

「便利だからだよ」

それきり、義豊はそのことを語らなかつた。

とまれ奉行衆の設置は理解されたのだ。

奉行衆の筆頭となる里見実堯は稲村の北向きにあたる宮本城に入り、頻繁に稲村城へ通った。正木通綱も稲村の北東にあたる山之城に入った。海路で白浜へ、陸路で稲村へ駆けつけ易い立地にある。

この年、古河公方・足利政氏は公方の位を高基に譲り、〈道長〉と号し出家するとともに扇谷上杉朝良を頼り武蔵久喜に引退した。

力尽くによる交替である。

それとは対照的に、里見氏の合議制確立は、平和のうちに為されたこととなった。

永正一一年（一五一四）六月。

義豊は稲村城下の改修の暇、鎌倉の禅寺と詩歌の交わりを重ねていた。その鎌倉からの書状により、三浦入道道寸と対峙する伊勢宗瑞が玉繩に城を築き、近頃は建長寺辺りまで兵馬が溢れている情報を義豊は知った。

その伊勢宗瑞が三浦攻めをしている頃、里見側も真里谷氏と連携し、原入道討伐のための軍事行動を実施していた。

結局、原氏との誼も奉行衆の理解の外である。

義豊の不本意な決定は、〈二統〉を志す心と真逆のものであった。

この合戦の采配は、陣中にある義豊という建前でありながら、実際には白浜城の義通のものであった。

義豊の脇に控える副将の実堯は、義通と綿密な連絡を交わしていた。だから白浜にいなながら、義通は軍事行動の一切を掌握していたのである。北郡を攻め進み、穂田浦の妙本寺を本陣とした実堯は

「大殿（義通）の御出馬を」と促した。

颯爽と陣所へ入った義通は、居心地悪そうな義豊を一瞥した。この陣中、義豊の名で軍勢は動いたが、本人はただの一度も口を開こうとはしなかつた。

このときは長陣にならなかつたが、翌年三月、義通はふたたび妙本寺を陣所とし、実堯を置いた。これは実堯が水軍を動員できる者であるからである。

この合戦の最中、原入道善寛は、領内に安堵状を触れるほどの余裕をみせていた。

この時点でも、やはり武力面で圧されていたのは真里谷信勝であった。その与力である里見勢は、兵を無駄に損なうことなく巧みに采配していた。

この年の一二月、義通は那古寺の梵鐘を再鋳した。

「大殿のおかげで、よい鐘を鳴らすことが適います」

義秀は表向きの作務をこのとき義弁に譲っており、この受領も彼が行った。父と子ではあるが、在家と出家の隔たりは他人行儀であった。

これは意識してのことではない。義通は一己の僧に対する慇懃さで接し、義弁もまた領主に対する畏敬の念で接した。

永正一三年（一五一六）七月一日。

伊勢宗瑞は三浦入道道寸の籠城する新井城を攻めた。三年がかりで三浦氏をじわじわと包囲

してきた伊勢宗瑞の地道な攻め方は、相手の息の根を止めるための確実な手段だったのかも知れない。

房総半島からは城ヶ島は視認できるが、その影に位置する新井城は見通せなかった。

三浦氏は上杉陣營の要である。

里見氏とも上手に立ち回り、江戸湾における双方の制海権は、暗黙のうちに確立していた。しかし、古河公方を立てる里見氏としては、その許しもなく勝手に三浦支援の軍勢を差し向けることは出来なかった。

足利高基は伊勢宗瑞に寄っている。

里見氏が無為等支援を行えば、古河公方家とも要らざる対立を招くこととなるのだ。

「援軍を差し向けてやりたいが……やりきれぬことよ」

義通は宮本城まで赴き、齒痒そうに実堯へと叫んだ。

「正木大膳（通綱）にとって三浦入道殿は仇敵、しかし、実の家が滅ぼされるとなれば、心中穏やかではござりませぬ」

実堯の言葉は、同情である。

「さりとて、いまの当主も無能ではあるまい」

「たしか扇谷上杉家からの御養子でしたな」

「上杉の血を引く割には、なかなか豪奢で、儂は嫌いではないぞ。おっと、弥九郎には聞かせられない話だのう」

「ほんに」

義通も実堯も、このち諍いを深めると予見している伊勢宗瑞のことを考えるだけで、気鬱になった。隙をみせれば、彼の者はきつと安房へも侵攻してくるだろう。

「宗瑞入道は、亡き道灌入道と同一年と云うていたが」

「はい」

「一体、齢はいくつなのじゃ」

「たしか、八七にもなろうかと」

「化け物だわ」

己はそんな長命で戦場を走りたくない、義通は呟いた。実堯とて同感だった。

この戦いで、遂に三浦一族は滅びた。

江戸湾越しに映る三浦半島の先端に、糸のような黒煙が認められた。里見実堯はそれを見つめながら、新しい時代のうねりを感じずにはいられなかった。

扇谷上杉氏は太田道灌に続き、大森・三浦といった家老を失ったのである。

十十十

小弓の嵐（2）

夢酔 藤山